# 基礎的・汎用的能力を育むキャリア教育の展開

## ～キャリア教育の見直しとキャリアパスポートの活用を通して～

１　主題設定の理由

２　研究の仮説

３　研究の計画

４　研究の構想

５　研究の実践

６　成果と課題

第２０分科会

高等教育・進路保障と労働教育

三宅　伸明　（西春・師勝中）

# 研究の概要報告

## １　県内の自主的研究活動のとりくみ状況

進路指導部会では、「基礎的・汎用的能力」を育ませる啓発的な体験活動を通して望ましい職業観や人生観を育むとりくみや、各学年で意図的に体験活動を計画し全校体制で系統的な活動のとりくむ活動がすすめられた。

また、教科横断的に活動するための仕掛けとして、児童・生徒への直接的な支援のみならず、教員どうしが情報を共有し連携を取りやすくするために、組織を新しく組み替えたり、他校種と連携した説明会のあり方も新しく改革したり、地域の学校間で情報を共有しやすくするためのしくみをつくるなどの活動もすすめられており、地域との連携をはかり、校種間のつながりのある進路指導・キャリア教育のあり方が工夫されていた。また、進路指導といえば中学校における実践がどうしても多くなるところ、小学校における実践の報告もなされており、小学校段階からの継続的な進路指導・キャリア教育のあり方が実践されていた。

## ２　今次県教研で論じられた主要な課題

実践の内容をふまえた討論では、柱となった問いに加え、児童・生徒たちの変容をどのように見取ったか、お互いのとりくみを紹介しあうとともに、児童・生徒たちに自分事として将来の生き方を考えさせるためには教員が具体的にどのように声をかけていくことが有効か話し合われた。また、組織的・計画的な活動をすすめる上で、学校全体でとりくむための工夫や配慮などについて議論がなされ，特別な時間にイベントとして行う進路指導・キャリア教育にとどまらず、教科や日々の教育活動と連携した進路指導・キャリア教育を推進していくための方法が議論された。そしてめざす方向性の共有や校種間・地域との連携のあり方について各学校のとりくみの工夫を共有する時間となった。

## ３　第 72 次教育研究愛知県大会にむけた課題

(1)「つながり」をどうつけていくのか

教科間の連携や，地域との連携，校種間の連携をどのようにとっていくのか，まず情報の共有から始め、積極的な連携を取るためのとりくみについて考えていく必要がある。

(2) 児童・生徒が「自分事」として課題にとりくむための工夫のあり方

社会課題をテーマに活動にとりくんだとしても、ともすると表面的な理解にとどまってしまうことも少なくない。そこで、児童・生徒に実感をもって課題にとりくませるためにはどのような学習が有効なのか、考えてくことが重要である。

(3) キャリア教育と進路指導の接続

キャリア教育で育んだ能力を，どのように自分の進路選択につなげ、いかしていくことができるのか、それを見据えた上で基礎的・汎用的能力を育ませ、一人ひとりの進路選択につなげていく方法を考えることが期待される。

# 報 告 書 の で き る ま で

第 71 次教育研究集会では、第 70 次教研まで積みあげられてきた成果をふまえ、各分会・各単組において、学校ぐるみの教育活動が続けられてきた。そして、その実践は各単組の集会で報告され、そこでの討論・助言をもとに、尾張ブロックから、合計５本のリポートが提出された。

本報告書は、「生き方指導」としての望ましい進路指導・キャリア教育を追究し、「自己の生き方を考える子どもの育成」をテーマに作成した。

| | | |
|---|---|---|
| 助　　言　　者 | 高綱　睦美（愛知教育大学） | 岡戸　秀一（知教連・さくら小） |
| 分科会教研推進委員 | 前田　直希（名古屋・高針台中） | 鈴木　雄一朗（知教連・阿久比中） |
| | 荻野　将輝（豊橋・南部中） | 山田　智公（海部・(津島)東小） |
| | 藤原　大　（西春・熊野中） | 山田　寛菜（海部・蟹江中） |

# 基礎的・汎用的能力を育むキャリア教育の展開
## ～キャリア教育の見直しとキャリアパスポートの活用を通して～

### １　主題設定の理由

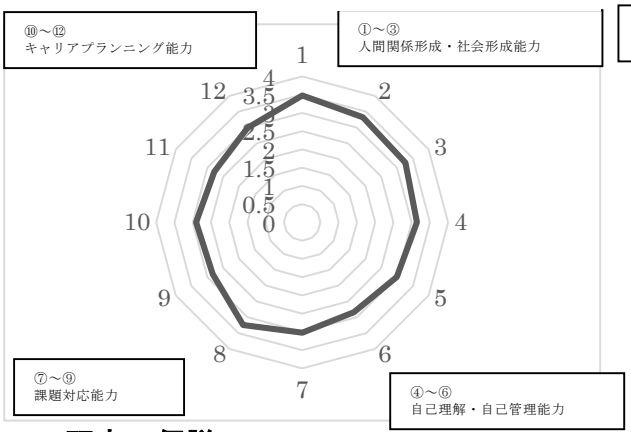
キャリア教育は、「一人ひとりの児童生徒が、将来の社会的・職業的自立にむけて、現在の学習と実社会とのつながりを意識し、目的をもって学ぶことが大切である」とされている。そこで、キャリア教育の視点から本校の教育活動を振り返り、キャリア教育を通して基礎的・汎用的能力の育成をはかるために、本校の全生徒と教員にキャリア教育の実態に関するアンケート調査を実施した。

アンケート結果（資料１・２）より、本校の生徒は基礎的・汎用的能力の中でも、人間関係形成・社会形成能力と課題対応能力は比較的高いものの、自己理解・自己管理能力とキャリアプランニング能力に課題がみられた。また、本校の教員も日々の教育活動で、人間関係形成・社会形成能力を育成する意識は高いものの、自己理解・自己管理能力と課題対応能力とキャリアプランニング能力の育成に対する意識が低いことが今後の課題として浮かびあがった。

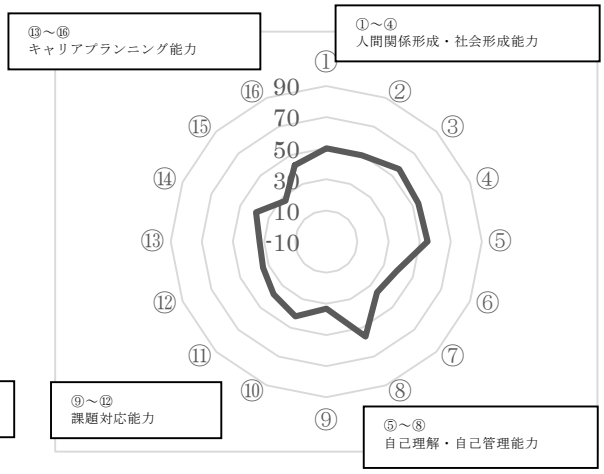
また、２０２０年４月より、すべての小、中、高等学校において、「キャリアパスポート」が実施されている。「キャリアパスポート」とは、小学校から高等学校までのキャリア教育にかかわる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりしながら、児童生徒が自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。そして、各地域や各学校の実情に応じて柔軟にカスタマイズして活用することが重要であるとされている。

そこで、キャリア教育に対する考え方や計画、指導方針を見直すことで、生徒の基礎的・汎用的能力の向上と教員の基礎的･汎用的能力を育てる意識の向上が期待できると考えた。また、キャリアパスポートを中心としたポートフォリオを用いる指導体制をつくっていくことで、生徒と教員に共通の課題である自己管理能力とキャリアプランニング能力を中心に、バランスのよい基礎的・汎用的能力を備えた生徒が育成できると考え、本主題を設定した。

【資料１　生徒用アンケート結果】




【資料２　教員用アンケート結果】




### ２　研究の仮説

中学３年間を見通したキャリア教育の体制を構築することと、「キャリアパスポート」を活用することで、生徒の自己理解・自己管理能力とキャリアプランニング能力を中心とした基礎的・汎用的能力が向上し、バランスのよい基礎的・汎用的能力を備えた生徒を育成することができるであろう。

## ３　研究の計画

仮説に迫る手だてとして、以下の２つを考えた。

**手だて１　３年間を見通した本校のキャリア教育の見直し**

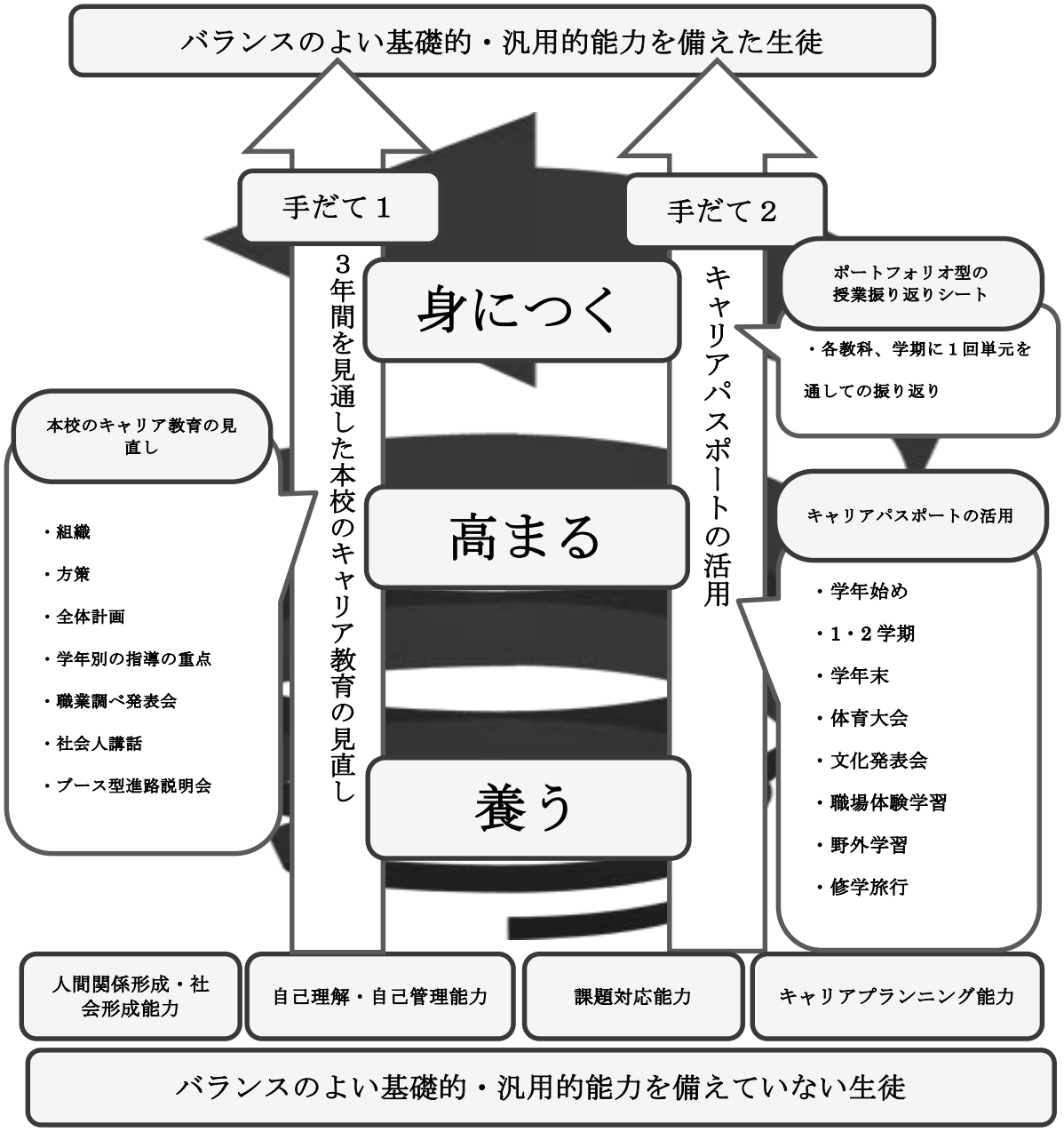
組織・方策・全体計画・学年別の指導の重点をキャリア教育の視点から見直す。

**手だて２　キャリアパスポートの活用**

①　キャリアパスポートを計画的に実施し、３年間を見通した系統的指導を行う。

②　授業・行事のキャリアパスポートを作成し、各教科・各行事でとりくませ、ポートフォリオとして記録する。

## ４　研究の構想＜研究構想図＞



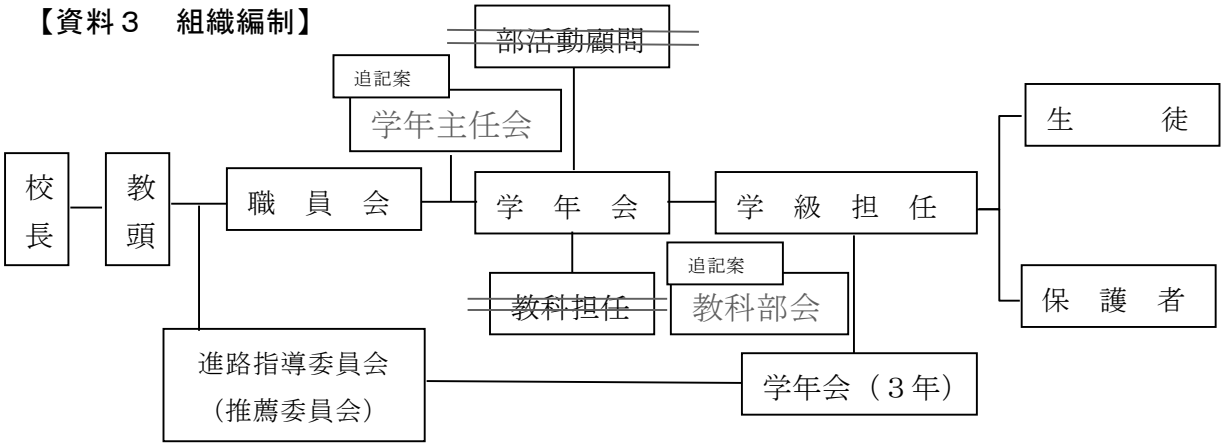
## ５　研究の実践

### (1) 手だて１（３年間を見通した本校にキャリア教育の見直し）について

生徒の社会的・職業的自立にむけて、必要な基盤となる基礎的・汎用的能力を育むことに重点を置いて、体制を整えた。

本校では、学校教育の円滑化のため実務指導の中心である教務主任と学年主任が報告・連絡・相談をする場として、これまでなかった「学年主任会」という組織を置いた。この組織をキャリア教育の共通理解の場として活用した。また、教科ごとの部会を、キャリア教育の展開という観点から改めて配置し、共通の基礎的・汎用的能力を育むための統一した教科指導ができるようにした（資料３）。

**【資料３　組織編制】**



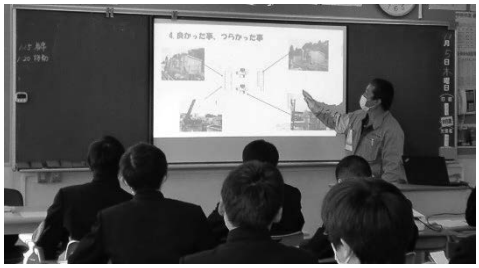

また、現行の進路指導の方策について、教務主任や学年主任、進路指導主事と連携して、そのあり方や、学年ごとの全体計画を再編成した。

そして全体計画では、コロナ禍ということも鑑みて、１年生が職業調べ発表会、２年生が社会人講話、３年生はブース型進路説明会を新たに設定した。

１年生の職業調べ発表会では、自分の身近な大人に職業インタビューを行い、その情報を画用紙にまとめて学級での発表会を行った（資料４）。そして、文化発表会では、発表会で用いた職業調べのまとめを全校掲示した。生徒たちの感想では、「自分自身が興味をもっていた職業の話もあり、今後にとても参考になった」や「働く人たちの思いを知ることができ、自分自身も将来働くことへの誇りをもっていきたい」など働くことへの見方・考え方や職業に対する興味・関心への深まりがみられた。

**【資料４　職業調べ発表会】**

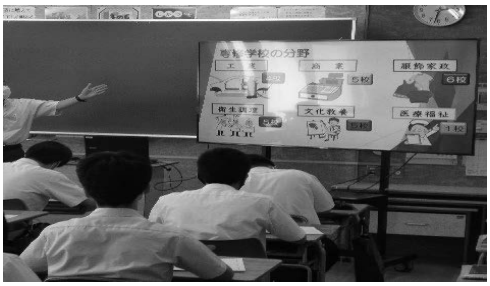
**【資料５　社会人講話】**



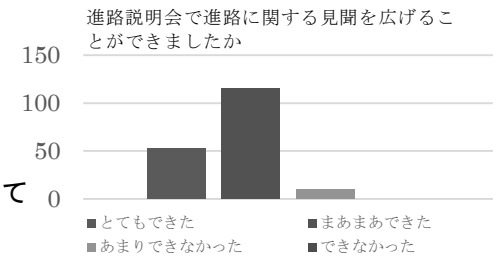
２年生の社会人講話では、電気工事士、パン職人、市役所職員、消防士、パイロット、理学療法士、介護福祉士、教員の８つの仕事から２つを選び、実際に働いている人から話を聞いた（資料５）。生徒たちの感想では、「働く人の工夫や配慮を知ることで、働くことの奥深さを感じることができた」や「働くことの喜びややりがいを熱く話してくださり、自分も将来、仕事にやりがいを感じたいと強く思った」などがあり、生徒たちの勤労観・職業観の形成がみられた。

３年生のブース型進路説明会では、公立高校（普通科・商業科・総合学科）と私立高校（普通科・商業科・工業科）と専修学校（普通科・工業系）の６校から３校を選び、１ブース３０～４０名程度で話を聞いた（資料６）。生徒たちの感想では、「学科の特徴と違いがよくわかった」や「取得できる資格など、細かいことを知ることができ、よりその学校へ興味が湧いた」などがあり、主体的な進路選択をする態度が身についた様子がみられた。また、事後のアンケートでは、多くの生徒が進路に関する見聞を広めることができたと答え、よりよい学びの場となっていたことがわかった（資料７）。

**【資料６　ブース型進路説明会】**



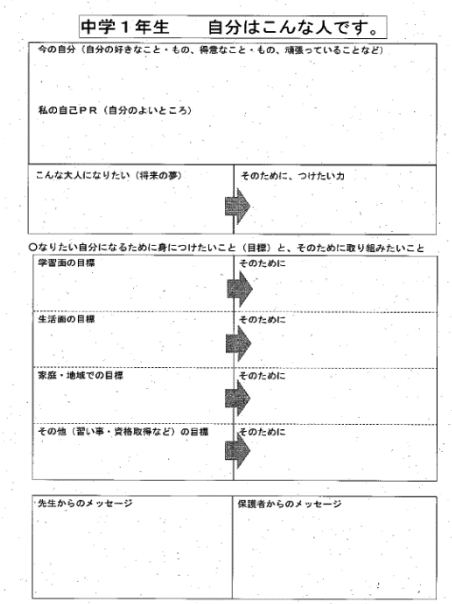
**【資料７　事後アンケート結果】**




**⑵ 手だて２（キャリアパスポートの活用）について**

キャリアパスポートを学期始め、学期終わり、学年末、宿泊行事と、３年間を見通して作成した（資料８）。また、それに加えて授業の振り返りシートを作成した（資料９）。

**【資料８　キャリアパスポート】**


中学１年生　　自分はこんな人です。

今の自分（自分の好きなこと・もの、得意なこと・もの、頑張っていることなど）

私の自己ＰＲ（自分のよいところ）

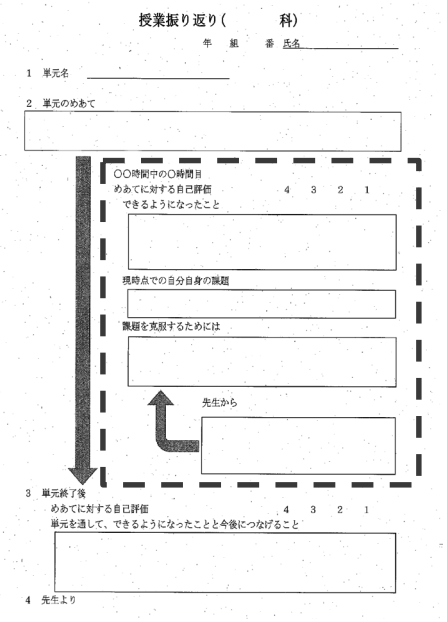
こんな大人になりたい（将来の夢）　そのために、つけたい力

○なりたい自分になるために身につけたいこと（目標）と、そのために取り組みたいこと

| | |
|---|---|
| 学習面の目標 | そのために |
| 生活面の目標 | そのために |
| 家庭・地域での目標 | そのために |
| その他（習い事・資格取得など）の目標 | そのために |

| 先生からのメッセージ | 保護者からのメッセージ |
|---|---|
| | |

**【資料９　授業の振り返りシート】**


授業振り返り（　　科）

年　組　番 氏名

1　単元名

2　単元のめあて

○○時間中の○時間目

めあてに対する自己評価　4　3　2　1

できるようになったこと

現時点での自分自身の課題

課題を克服するためには

先生から

3　単元終了後

めあてに対する自己評価　4　3　2　1

単元を通して、できるようになったことと今後につなげること

4　先生より

この授業振り返りシートでは、初めに目標をたて、終わりに振り返るという従来のものを改善し、資料９の破線部のように途中にも振り返りを行い、目標達成のためのとりくみの方向性を修正できるようにした。例えば、学習であれば、「方程式を解けるようにする」などの目標を初めに設定させ、途中の振り返りでは、目標に対する自分自身の現状を把握させ、何が課題かを考えさせる。自分の進路や生き方といった、長期的な目標達成のための過程において、自己理解・自己管理能力は必要不可欠である。途中での振り返りと軌道修正の経験を積ませることで、それらの向上がはかれるだろうと考えた。

また、生徒が書いたことに対して、教員がコメントを書くようにした。教員から学習方法などの具体的アドバイスや、目標達成のための助言を行うことで、生徒たちの考えの幅を広げた

り、さらにがんばろうとする意欲を高めたりするきっかけになると考えた。

教科学習の単元末や行事後の振り返りでは、目標に対してだけでなく、今回の経験をどう次にいかすかも書かせた。授業・行事など、３年間の学校生活が、学校全体で系統的に指導できると考えたからである。そして、その振り返りに対しても教員からのコメントを行った。これは、生徒自身のがんばりやその過程を認め、次につながるように導くことを意図している。このように生徒自身が予見、遂行、自己内省のサイクルで自分自身と向き合う活動を行い、教員が個に応じた助言をしたり、認めたりすることで、自己理解・自己管理能力やキャリアプランニング能力を中心とした基礎的・汎用的能力の向上をはかることができると考えた。

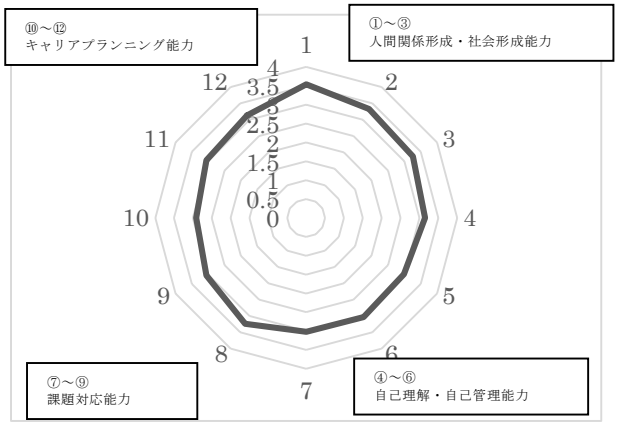
このキャリアパスポートをポートフォリオとして記録し、毎年引き継いでいくことにした。例えば、中学校では、体育大会や文化発表会などの行事がある。毎年引き継ぎ、記録に残すことで、生徒は昨年度のものを確認してから自分の成長にむけた目標を考えることができる。単発的にキャリアパスポートを行うのではなく、それまでの経験もふまえて考えさえることで、より一層自己理解・自己管理能力やキャリアプランニング能力の向上がはかれると考えた。

今回の実践では、体育大会と文化発表会においてキャリアパスポートを行った。体育大会では、「とにかく跳ぶ」や「大きな声を出す」などの抽象的な記述が多くみられた。しかし、「みんなが跳ぶためにはどんなことが必要か」「どんな声がどんな場面で必要か」など、目標達成にむけて生徒が主体的に考えるための助言を教員が行った。その結果、文化発表会では、「大きな声を出すためにも息をしっかり吐いてから吸う」や「リーダーとしてみんなに話すときは、よかった点から話すようにして、課題は最後に伝える」など具体的な記述がみられるようになった。

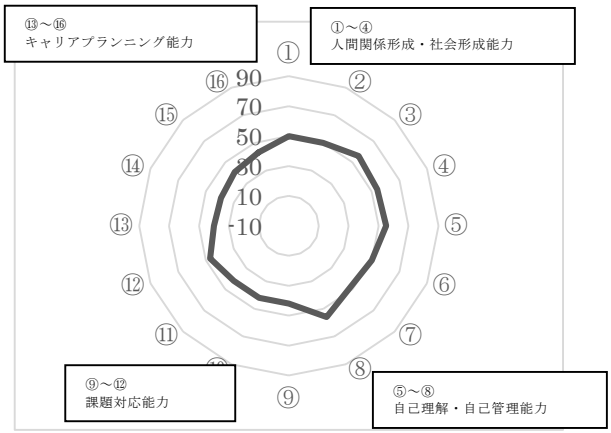
## ６　成果と課題

手だて１、手だて２の実践後、初年度に行ったアンケートを再度実施したところ、生徒も教員も課題であった自己管理能力とキャリアプランニング能力の向上がみられた（資料１０・１１）。

**【資料１０　生徒用アンケート結果】**




**【資料１１　教員用アンケート結果】**



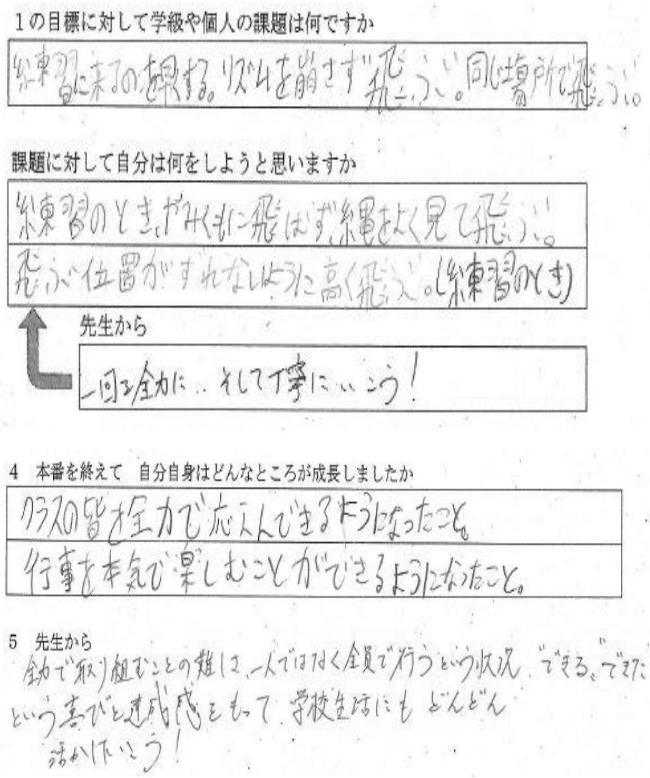

手だて１では、キャリア教育の視点を重視し、方策・全体計画・学年別の重点目標を、基礎的・汎用的能力の向上をめざしたものに見直した。これにより一人ひとりの教員の受け止め方や実践の内容・水準がそろった。また、組織では新たに位置づけられた学年主任会において、

キャリア教育の観点から、各学年の学習や行事の現状や成果について話し合った。こうすることで、学年間の歩調を合わせるとともに、キャリア教育についての方向性をそろえることもできた。手だて１の実践により、教員が生徒の自己管理能力やキャリアプランニング能力を高めようとする意識をもつことができ、効果的に生徒の能力を高めることができたと考えられる。

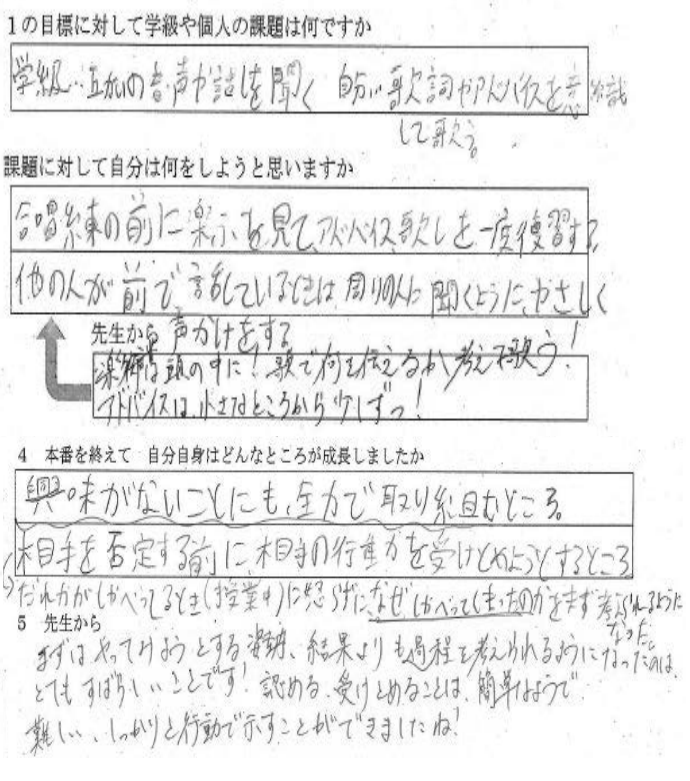
手だて２のキャリアパスポートの活用において、ある生徒は、体育大会では自分自身のことが中心の記述のみであったが、文化発表会では自分自身だけでなく、学級の仲間に対しても関心の高い記述が見られた。また、行事後の振り返りでも体育大会、文化発表会と経ていく中で、今後の生活についても考えることができるようになった。また、この生徒だけでなく、多くの生徒から、教員からのコメントに対して、「先生のコメントに勇気づけられた」や「うまくいかなくて悩んでいたが、どのようにがんばればよいかわかった」という発言が聞かれた。特に行事後の振り返りでは、体育大会は「楽しかった」などの漠然とした記述が多くみられたが、文化発表会では、「僕は、人の話を聴くことは苦手だが、今回、リーダーの発言を聴くことでより学級がまとまり、よい合唱になったので、授業などでも聴くことを意識したい」など、各自の今後の学校生活につながる記述もみられるようになった。このことから、生徒たちの自己理解・自己管理能力やキャリアプランニング能力が高まったと考えられる（資料１２）。

**【資料１２　生徒が体育大会と文化発表会のキャリアパスポート】**

**体育大会**




**文化発表会**




手だて１、手だて２の実践により、生徒の自己管理能力、キャリアプランニング能力を中心とした基礎的・汎用的能力を高めることができたが、その高まりはまだ小さく、決して十分とはいえない。今後は生徒の実態に合ったキャリア教育の見直しや、キャリアパスポートを改良、実践していき、よりバランスのよい基礎的・汎用的能力を備えた生徒の育成につとめていきたい。